



滋 賀 県
女 性 医 師
ネ ッ ト ワ ー ク
会 議

滋賀県女性医師

2018年(平成30年)9月

ネットワークだより

vol.7

みんなが活躍できる働き方改革

滋賀県女性医師ネットワーク会議
会 長 有 田 泉
(高島市民病院 小児科科長)



みなさま、こんにちは。

先日、東京医科大学の入学試験で女性の受験者全員に対する減点操作が何年にもわたって行われていたことが報道されました。この問題の根はかなり深く、同大学のみならず日本全体の医師の働き方そのものが問われていると考えられます。

わたしたちは、女性も男性も働きやすい職場づくりを目指している女性医師の集まりです。滋賀県病院協会・滋賀県医師会・滋賀医科大学から推薦され

て集まった女性医師10名で滋賀県女性医師ネットワーク会議を構成し、微力ながら活動しています。事務局は滋賀県医師キャリアサポートセンターです。昨年度は「医師の勤務環境改善に関する提言」を滋賀県知事と滋賀県内病院の病院長・病院管理者宛に提言し(下記にリンクあり)、11月には第6回女性医師交流会を開催しました(裏面参照)。今年度は「みんなが活躍できる働き方改革」をテーマに第7回交流会を10月27日(出)14:30から開催します(詳しくは同封のパンフレットをご覧ください)。みなさまに交流会へのご参加をお願い申し上げます。

2018年8月
滋賀県女性医師ネットワーク会議のサイト：
<http://www.shiga-med.ac.jp/~ishicsc/doc/wdnm.html>



第6回滋賀県女性医師交流会(2017年11月18日)

第6回

滋賀県女性医師交流会 報告

滋賀県女性医師ネットワーク会議は、「女性も男性も楽しく働く！」をテーマに第6回滋賀県女性医師交流会を開催しました（2017年11月18日(土)14:30～17:30）。場所は滋賀医科大学構内に新築されたばかりの「リップルテラス」2階の大会議室。今回は、病院長、病院勤務医師、開業医師、事務長、事務職員、滋賀県庁職員、滋賀県病院協会職員、滋賀県医師会職員、滋賀医大学生、龍谷大学教員・学生など合計63名の方々にご参加いただきました。

基調講演は、「女性医師支援の長い道のり」と題して、京都府立医科大学 眼科学教室教授・外園千恵先生にご講演いただきました。外園先生は女性医師の先達の1人として、4人のお子様の母親として、女性医師支援に長年取り組み、着実な成果を上げて来られた先生です。外園先生は、日本全体の女性医師のデータ分析だけでなく、京都府立医大卒業生(男女)の就業実態解析も紹介されました。そして、病児保育室の開設・研究支援員雇用事業・フューチャーステップ(FS) 研究員制度・特定専攻医制度など女性医師が研究や診療をする上で大変有用な制度を次々と実現された経緯をお話されました。

その上で、「まっとうな給料を常勤医師が貰わないと常勤医師が増えず、悪循環に陥る」「長時間労働を見直すことも必要」「医師の側も、仕事や家庭について発想の転換が必要」と指摘されました。『医師の資格は自分が勉強して取ったものだから、それをどう使うか自分の好きにして良い』という考え方もあるが、『医学教育を受ける権利には、社会還元という義務がある』という考え方もある。医学生の時から『権利と義務』について意識を深めてもらうことが重要、というお話で講演を締めくくられました。



(外園千恵教授)

質疑応答では「非常勤医に一旦なると、常勤医に戻らない人も多い。対策は？」「FS研究員や特定専攻医について、当直の希望がある時の対応は？ 当直料は？」「各種の支援制度の周知方法は？」などの質問があり、それぞれお答えいただきました。

次に滋賀医科大学の尾松万里子先生(学長補佐、生理学講座 細胞機能生理学部門 准教授)に、「滋賀医科大学 男女共同参画推進室の取組～内閣府「平成29年度女性のチャレンジ賞特別部門賞」の受賞にあたって～」をご講演いただきました。尾松先生は、3才のご子息と一緒にご夫妻で留学をされた時のご経験も交えながら、滋賀医大の研究支援員配置制度・三方よし人材バンクの設置・女性医師支援のための特任助教配置制度・スキルズアッププログラムなどについて紹介されました。その中でも、滋賀医大独自の「三方よし人材バンク」は、登録する学生・研究者・社会(大学・病院含む)の三方それぞれにメリットが大きい制度で、今後も活用が期待される、とのことでした。

男性も楽しく働く



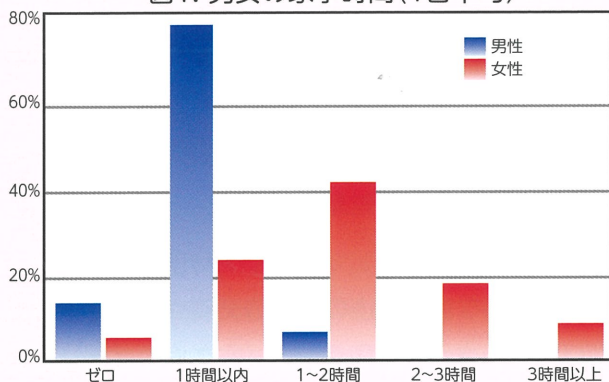
(尾松万里子准教授)

その後、会場の皆様にケーキと珈琲・紅茶等で小休憩していただいた後、クリッカーを利用して皆様のご意見をお伺いし、その場で集計しました（担当は当会議委員の梅田朋子先生）。

クリッカーの即時集計で、会場の女性で出産後に産休以外に育児休業(育休)を取った人は30.4%、取らなかった人は69.6%でした。会場の男性で育休をとった人は0%でした。

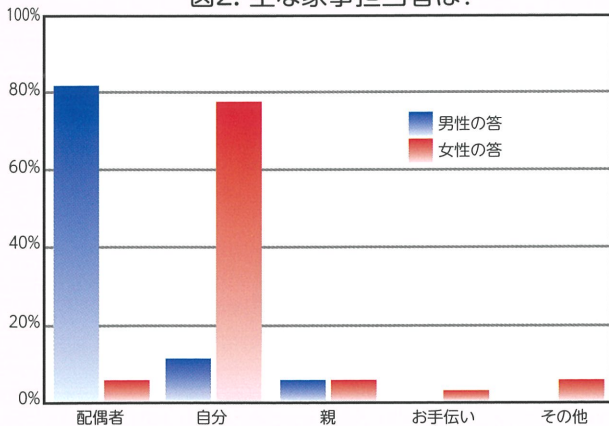
家事に費やす時間が1日平均で1時間以上の方は、女性の69.7%、男性の7.1%でした(図1)。

図1. 男女の家事時間(1日平均)



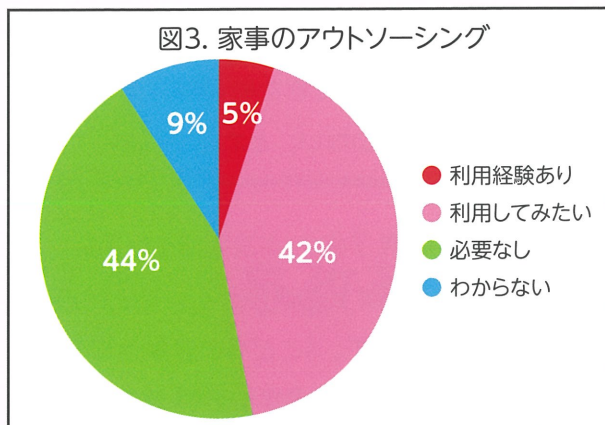
『家事を主に担当するのは誰ですか』という質問に対して、女性は「自分78.1%、配偶者6.2%」という回答でしたが、男性は「配偶者82.3%、自分11.8%」という回答でした(図2)。

図2. 主な家事担当者は?



家事のアウトソーシングについての質問では、図3に示すように「利用経験あり」は5%と少ないものの、「利用してみたい」は42%あり、家事アウトソーシングに興味を持っている人は少なくない実態が浮び上がりました。

図3. 家事のアウトソーシング



クリッカーで会場の皆様の現状・ご意見を集計した後、パネルディスカッションでは若手医師4名に「女性も男性も楽しく働く！」をテーマにプレゼンテーションをしていただきました。



(左から小田先生、入山先生、沖先生、東先生)

トップバッターは東長佳先生(草津総合病院、糖尿病・内分泌内科)。卒後3年目の後期研修医で「忙しいけど臨床がとても楽しい、糖尿病専門医も取りたい、海外留学も考えて英語も勉強中」と超多忙な現状と将来の夢をお話し下さいました。

2人目は沖達也先生(滋賀医大)。卒後2年目の初期研修医で「公衆衛生に興味があり、社会医学系の専門医を取得したい。2ヶ月前に同期の女性医師と

結婚した」とのこと。ご夫妻で新しい家庭を築こうと模索されていました。

3人目は入山圭司先生(滋賀医大・整形外科医員)。初期研修医時代の遠距離恋愛～結婚(相手は女性医師)をスライドで紹介された後、『気付いたらやる』『お互い手伝う』『無理をしない』をモットーとしていること、こどもができた時の具体的な生活イメージはまだ掴めていない、とお話されました。

4人目は小田亜希子先生(市立大津市民病院)。集中治療専門医を目指す初期研修医として、6才と3才の2児の母親として、『こどもの食生活に気をつける』『月2回は家族で外出する』『夫婦間でお互いのやりたい事を尊重する』という秘訣と、感謝の大切さをお話されました。

パネルディスカッションの質疑応答では、会場から「男性の育児休業についてどう思うか?」という質問が出て、パネリストの若手医師の皆様からはそれぞれ肯定的な意見が出ました。

その後、司会をつとめる当会議委員(奥川郁先生、ト部優子先生)が、会場におられた病院長の先生方にご意見を伺いました。病院長の先生方は、「男性



医師の育児休業について、法律は充分理解している。しかし、ぎりぎりの人数で診療している現状を考えると実際は難しい」と苦しい実情をお話し下さいました。そのお話を受けて、基調講演をされた外園千恵先生は「男性の育児休業について、長い期間をイメージすると難しいという病院長のお話もよく分かる。でも、たとえ3日でも1週間でも取ってもらった方が良い。育児の大変さを男性も実際に体験することが将来の大きな財産になる」とお話されました。

このような盛り沢山の内容の交流会となり、あっという間の3時間だったという印象を受けました。お忙しい中、ご参加いただきました皆様に感謝を申し上げますと共に、今回の交流会の内容が皆様の職場や家庭で少しでもお役に立てれば幸甚と存じます。

(滋賀県女性医師ネットワーク会議 有田 泉)

発行：滋賀県女性医師ネットワーク会議

会長	有田 泉	高島市民病院 小児科科長
副会長	梅田 朋子	滋賀医科大学 地域医療教育研究拠点准教授/地域医療機能推進機構滋賀病院 乳腺外科診療部長
	洲崎 聡	市立大津市民病院 健診センター診療部長 外科医長
委員	ト部 優子	社会医療法人誠光会 草津総合病院 産婦人科統括部長
	加地 まり	加地眼科 院長/滋賀県医師会
	金 共子	大津赤十字病院 第二産婦人科部長
	古倉 みのり	医療法人社団仁生会 甲南病院 理事長
	西島 節子	彦根市立病院 小児科主任部長/滋賀県医師会理事
	野田 恵加	市立長浜病院 消化器内科部長
	山原 真子	滋賀医科大学 医師臨床教育センター副センター長 助教 (以上、五十音順)

お問い合わせ先：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学病院管理課内 滋賀県医師キャリアサポートセンター
(事務局) TEL 077-548-3656 FAX 077-548-2522
E-mail ishicsc@belle.shiga-med.ac.jp HP www.shiga-med.ac.jp/~ishicsc/